

2018年度 明治大学教育職員免許状更新講習 担当割

講習日	領域	講習名	1 時限	2 時限	3 時限	4 時限
			9:30 ~ 10:50	11:00 ~ 12:20	13:20 ~ 14:40	14:50 ~ 16:10
7月30日(月)	必修	教育の最新事情(1)	山下 達也 明治大学文学部准教授	高野 和子 明治大学文学部教授	松田 美登子 東京富士大学経営学部教授	
			教職についての省察	法令改正及び国の審議会の状況等	学校とカウンセリング(1) 特別支援教育におけるカウンセリングの実践	学校とカウンセリング(2) 高等教育機関における神経発達障害学生の支援
			<p>これまでの教職生活についての省察を行うため、「教師のライフコース」に着目します。「教師のライフコース」は、個人が教師として歩んできた軌跡そのものであり、「教育専門家としての教師の発達」の過程です。「認知的な地図」が描かれることにより、いつ、どこで、どのような成長や子ども観、教育観の変化があったのか、自分がどのような教師なのかといったことについての自覚が促されます。受講者全員に「教師のライフコース」を作成してもらい、グループでの意見交換・議論を行う予定です。「自分語り」の経験と多様な教師(他者)のライフコースへの接触により、教職についての省察を図ります。</p>	<p>なぜ、学校現場の教員が「法令改正及び国の審議会の状況等」を学ぶのでしょうか?本時では、教育改革が喧伝されるなかで学校教員がどのような位置に置かれているのかにまず意識を向けます。そのうえで、教育基本法改正(2006年12月)から今日に至るまでの状況を大づかみ出来るように学び、政策の方向性を把握します。1時限目の「教員としての子ども観、教育観等」についての省察で学んだことをふまえて、この時間には、教育政策の展開との関係で自身の教員生活を時系列的にふり返り、この先の学校と自身の教育活動について考えていただきたいと思います。</p>	<p>(1)学校現場におけるカウンセリングの活用として、ADHDやASD等の神経発達障害を持つ児童・生徒に対する特別支援教育を取り上げます。神経発達障害の基礎知識の講義では、最近の研究について報告します。さらに、事例を中心に、児童・生徒や保護者に対するカウンセリングや教員との連携の様子及びチームとなって支援する様子を紹介しながら、学校とカウンセリングについての理解を深めます。</p> <p>(2)大学、短期大学、高等専門学校(以下、大学等)では、小中学校や高等学校における特別支援教育の充実と大学等への進学率の上昇から、神経発達障害を持つ学生の増加が予想されています。さらに、2016年度より「障害者差別解消法」が施行され、大学においても「合理的配慮の提供」が法的義務もしくは努力目標となりました。そのため学内での支援体制づくりが急務となっています。神経発達障害を持つ学生の課題について、学生生活支援とキャリア支援の様子を中心に講義します。</p> <p>(1)と(2)より、中長期的な展望から、神経発達障害を持つ児童・生徒に対する特別支援教育の意義や発展の可能性および課題について、皆さんといっしょに考えたいと思います。</p>	
<p>「国の教育政策や世界の教育の動向」「教員としての子ども観、教育観等」についての省察「および」「学校とカウンセリング」について学びます。世界の教育の動向とそれによって相対化される日本の学校教育や教師像のあり方、「自分語り」や他者との接触による自己への省察、神経発達障害を持つ児童・生徒に対する特別支援教育の意義や発展の可能性と課題などを扱います。</p>						
7月31日(火)	選択必修	教育の最新事情(2)	関根 宏朗 明治大学文学部准教授	齋藤 孝 明治大学文学部教授	藤井 剛 明治大学文学部特任教授	
			アクティブ・ラーニングを活用した道徳科の指導について	今求められる学力とアクティブ・ラーニング	アクティブラーニングを用いた主権者教育	
			<p>2018・19年度からの「教科」化にもない、その重要度がますます高まっている道徳科の指導において、同じく文部科学省が強調しているアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業づくりの可能性を考えてみたいと思います。上記の教育改革の流れを概括的に確認するとともに、実践的な事例の紹介・検討を通して、児童・生徒たちの能動的な学修を刺激づける道徳科指導法のイメージについて具体的に展望します。</p>	<p>これからの時代に求められる学力とは何かを、伝統的学力と新しい学力の二つを軸として考える。また、現在注目されているアクティブラーニングの本質を実践的に理解することを目標とする。授業スタイルとしても、グループワークを取り入れ、アクティブラーニングを実践する形で進めたい。</p>	<p>2016年、公職選挙法が改正され、「18歳選挙権」が実現した。総務省と文科省は「私たちが拓く日本の未来」を作成し、全国の高校生に配布して、ここに「主権者教育」が始まった。本講習では、「主権者教育」の理論的背景を概観すると同時に、「中立」などに配慮した「主権者教育教材」を体験していただきたいと考えている。</p>	
<p>「学習指導要領等に基づき育成すべき資質及び能力を育むための習得、活用及び探究の学習過程を見通した指導法の工夫及び改善」として、現在、全国の学校現場で様々な実践が試みられている「アクティブ・ラーニング」を取り上げ、それについて「道徳科における指導」、「これからの時代に求められる学力」、「主権者教育における授業実践」の3つの側面から学びます。</p>						
8月1日(水)	選択(カウンセリング)	教師への支援と子ども理解	諸富 祥彦 明治大学文学部教授		高瀬 由嗣 明治大学文学部教授	
			学校場面におけるカウンセリング 学校経営と保護者対応にカウンセリングをいかす		児童・生徒の心理の理解と支援—心理テストの視点から—	
			<p>本講座では、学校現場におけるカウンセリングの役割について、2つの視点から学びます。第一に、カウンセリングを学校経営にどのようにいかすかというポイントから学びます。第二に、保護者対応に際して、どのようにすればよいかを学びます。ともに具体的な事例を取り上げつつ実践に即した内容を扱い、学校とカウンセリングについて理解を深めることを目的としています。エンカウンターなどの実習も含めて体験的な学習とする予定です。</p>	<p>児童・生徒の心理をよりよく理解し支援するための方法を、心理テストの視点から学ぶ。その具体的な内容として、前半は、心理テストの基本的な考え方、意義と目的、そして方法について学習する。後半では、教育現場で利用可能な心理テスト(主にWISC-IV)を取り上げて、子どもを適切に理解し、支援する方法を学ぶ。授業では、事例をまじえながら、心理テストを初めて学ぶ人にもできるだけわかりやすく解説する予定です。</p>		
<p>カウンセリングを学校経営と保護者対応に活かすポイントについて学びます。さらに、心理検査・心理査定の手法の基礎について学ぶとともに、それらを用いて子どもを理解する方法について理解を深めます。これらの学習により、教師の実践的な能力を高めることを目的としています。</p>						
8月2日(木)	選択(カウンセリング)(授業作り)	子どもの育ちと学びの支援	武田 洋子 川口短期大学こども学科准教授	伊藤 直樹 明治大学文学部教授 山下 聖隆(ゲストスピーカー) 川崎こども心理ケアセンターかなで	林 幸克 明治大学文学部准教授	
			思春期を見据えた子育て支援について	学校における子ども虐待への理解と対応	参加学習型ボランティア学習	
			<p>子育て支援という、乳幼児とその親を対象にしたものとはちがう。しかし、子どもの長きにわたる育ちを見ていくと、乳幼児期を子どもがどのように過ごし、親がどのような状態で子育てを行い、この時期に親子でどのような関係性を形成したのかは、思春期以降の子ども育ちに大きく影響することがわかる。よって、子育て支援には、思春期以降の育ちを見据えた支援という視点が必要となる。本講習では、子育て支援について事例を交えながら概観し、これをもとに、学校現場での親への対応や子ども理解のための視点について考えていきたい。</p>	<p>全国の児童相談所の虐待相談対応件数は、年々増加しており、学校においても虐待対応は喫緊の課題となっています。虐待を受けた子どもとその家族への理解と対応について、児童心理治療施設(旧情緒障害児短期治療施設)で関わった子ども達との具体的な経験を交えながら、学校現場で必要とされる視点や対応の観点からご自身の経験についてお話ししたいと思います。</p>	<p>中学校・高等学校におけるボランティア学習の在り方について具体的・実践的に学び、現状と課題を明らかにしつつ、現場での取り組みに活かすことをねらいとする。まず、講師が、アクティブ・ラーニングの手法を用いたボランティア学習の事前指導・事前学習を模擬的に行う。受講者は、それを、生徒の立場で体験してもらい、教師の視点で振り返り、意義と課題を明確にする。その後、各自のこれまでの取り組みの可能性と限界について議論する。それらを踏まえて、アクティブ・ラーニング型のボランティア学習の事後指導・事後学習について、具体的・実践的に検討する。なお、受講者は、可能であれば、これまでのボランティア学習指導に関わる各種資料等を持参して、講習に臨んでほしい。</p>	
			<p>内容は以下の通りです。 ・学校が虐待対応に果たす役割 ・虐待を受けた子ども達への理解と対応 ・虐待してしまう家族の抱える問題への理解と対応 ・虐待支援の基礎となる支え合う関係性とは</p>	<p>伊藤 貴昭 明治大学文学部准教授</p> <p>学習意欲を高める授業実践とは</p>		
<p>近年、教育心理学では実践に貢献するための教授・学習研究が盛んに行われています。本講習では、その中でも特に学習者の学習意欲に関連する最新の研究を軸にして、参加者自らの授業実践を振り返りつつ、理論との関連について考えていきます。実践のあり方によって学習者の意欲がどのように影響を受けるのか、教師はどのようなポイントに(暗黙にせよ)留意しているのかについて、動機づけ理論の側面から検討します。なお、講習では参加者相互の実践経験を交流させながら、自らの実践を振り返る活動を中心に進めていく予定です。</p>						
<p>以下のテーマを取り上げながら、子どもの育ちと学びの過程、および学校や教師の役割について、より多面的にとらえる視点を養います。 ①子育て支援の実践と虐待を受けた子どもに対する関わりポイント ②参加学習型ボランティア学習 ③学習意欲を高める授業実践とは? このうち、②と③はいずれか選択となります。詳細については、ホームページないしパンフレットをご覧ください。</p>						

2018年度 明治大学教育職員免許状更新講習 担当割

講習日	領域	講習名	1 時限		2 時限		3 時限		4 時限			
			9:30 ~ 10:50		11:00 ~ 12:20		13:20 ~ 14:40		14:50 ~ 16:10			
8月3日(金)	選択 (教科教育)	授業改革の 視点と方法	【英 語】	尾関 直子 明治大学国際日本学部教授		遠藤 雪枝 明治大学文学部兼任講師						
				CEFRとCAN-DO リスト		タスクに基づいた指導法とパフォーマンス評価		「言語教師のポートフォリオ」を活用した省察				
				文科省は、2011年に「中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で具体的に設定することにより、学習指導要領の内容を踏まえた指導方法や評価方法の工夫・改善が容易になる」と「英語力向上のための5つの提言」の中で提案しました。2014年の文科省の調査によると、CAN-DOリストを作成している高校は、既に半数以上にのぼっています。また、新学習指導要領では、CAN-DOリストの形で英語を使って何が出来るかを明記することになっています。この講習では、CAN-DOリストの元となり、現行の学習指導要領と、理念や指導方法において共通点も多いCEFR(Common European Framework of Referenes for Languages)について学習します。CEFRの理念と学習指導要領の理念には、共通点が多くあります。大きな共通点としては、「生きる力」を育む、つまり、自律した学習者を育てることが理念としてのことです。次にCAN-DOリストの具体的な作成方法を考えます。CAN-DOリストを授業で活用するには、適切なCAN-DOリストが必要です。現在、CAN-DOリストを既に作成し終わった方も、授業でリストをより活用できるように、もう一度CAN-DOリストを見直しましょう。また、CAN-DOリストに書かれた到達目標を達成するためには、どのような指導をすればよいのかについても考えます。		CAN-DOリストに基づいた授業を行うということは、生徒が言語で何が出来るかに焦点を当てた授業をすることになります。言語で何が出来るかを焦点にした授業は、action-orientedな授業、つまりタスクに基づいた指導方法を取り入れることとなります。タスクに基づいた授業では、学習者が主体となったいわゆるactive learningを目指すこととなります。それでは、タスクとは何であり、どのような特徴があるのでしょうか。タスクの特徴としては、意味に重点が置かれている、ある特定の目標がある、活動をしている間に学習者間にインタラクションがある、学習者は、自由に言語を選ぶことができるなどがあります。それでは、タスクはどのように作れば良いのでしょうか。更に、指導と評価は、一体化すべきです。タスクを取り入れた授業を実践した場合、従来の紙と鉛筆を使ったテスト方式の評価では、授業で行なったことを正確に測ることはなりません。タスクを取り入れた授業を実践すれば、それにふさわしい評価をしなくてはなりません。そのような評価をオーセンティックな評価といいますが、その中の一つであるルーブリックを使ったパフォーマンス評価について学習します。		J-POSTL「言語教師のポートフォリオ」の活用法をみていく。J-POSTLとは、EPOSTL「ヨーロッパ言語教育履修生ポートフォリオ」(the European Portfolio for Student Teachers of Languages)を日本の教育現場でも受容できるように翻訳されたポートフォリオである。J-POSTLの主な特徴は以下の5点である。1) 英語教師に求められる授業力を明示する。2) 授業力とそれを支える基礎知識・技術の振り返りを促す。3) 同僚等との話し合いと協働を促進する。4) 自らの授業の自己評価力を高める。5) 成長を記録する手段を提供する。自己の長所や改善点、指導方法等に対する気づきや省察のツールとして、このポートフォリオを活用していく。				
			益田 裕充 群馬大学教育学部教授		早川 雅晴 植草学園大学発達教育学部准教授							
			新しい学習指導要領の改訂と理科授業のデザインベース		新学習指導要領で求められている理科の授業デザイン							
			学習指導要領が改訂され、「見方・考え方を働かせる」方法とはどのようなものか各教科で検討が必要となりました。そこで、本講習では、理科授業のデザインベースである「問題解決の過程(探究の過程)」を学び合います。この講習を終えると、ワンランク上の授業観を身につけることができるような授業デザインの省察となる講習を目指します。まず、理科授業で教師が日常取り組まれている授業を省察します。問い(課題・問題)があっても答えのない授業。この授業は問題解決のストーリーに課題があると云えます。結果と考察はどうか区別すればよいのでしょうか。身近にある授業の問題を授業のストーリーの観点から解決します。日頃、理科授業に取り組まれている教師が知っていると考えている、当たり前だと考えている授業の指導過程を省察します。さらに、今日、求められている資質・能力を育成する授業をデザインするヒントも問題解決のストーリー性を高めるための「各局面の関係づくり」にあることを省察していただきます。どのような関係の成立が重要なのかを再考し、この学びが日々の授業デザインの改善に資する学びとなるようにします。		「理科」を英訳するとScienceとなりますが、Scienceを日本語訳するとはじめに「科学」という文字がでてきます。「理科」と「科学」はイコールなのでしょうか。「理科」は「科学」にはない日本独自のニュアンスを含んだ教科です。私達は無意識のうちにこのニュアンスを内包した理科教育を実践してきています。2017年に公示された新学習指導要領でも、この特徴は継承されていますが、グローバル化や激しい社会環境の変化への対応の立場から、変革が求められている部分もあります。このことを新学習指導要領から表記方法が大きく変わった理科の目標を中心に解説します。そして改めて学習指導要領で学習内容の系統性を俯瞰します。次に、その目標達成のツールとして、理科の授業の特徴である実験・観察の方法について、思考プロセスの修得を意図化させるためのアクティブラーニング等の授業デザインについて検討していきます。							
			金子 幹夫 神奈川県立平塚農業高等学校初声分校・総括教諭		山田 朗 明治大学文学部教授 渡辺 賢二(ゲストスピーカー) 明治大学平和教育登録研究所資料館展示専門委員							
			社会科・公民科における教材づくり研究		社会科・公民科の授業研究		歴史把握の方法 《映画・映像から学ぶ戦争の歴史》		主体的学習の事例研究 《生徒が主体的に取り組む歴史探究の取り組み》			
			本講習では、社会科・公民科における教材づくりについて、様々な問題点をあぶり出し、その諸問題を再構築することを目的として設定します。この目的設定の背景には、教育職員免許状更新講習を受ける多くの受講者がアクティブ・ラーニングに関連する問題意識を持っていることがあげられます(昨年の受講者アンケートより)。そこで、あらためて社会科・公民科における有効な教材づくりを目指すにあたって、どのような課題があるのかをあぶり出してみたいと思います。その上で、それぞれの課題を検討し、明日からの教材づくりのために課題の再構築を試みたいと思います。 ① 研究協議(1)「教材づくりの諸課題」 ② 社会科・公民科教材作成についての課題の整理 ③ 社会科・公民科の教材づくりについて ④ 研究協議(2)「教材づくりの諸課題の再構築」 ⑤ リフレクション		本講習では、「アクティブラーニング」を中心に「社会科」「公民科」の授業研究を取り上げる。授業を構築するにあたって、一人ひとりの教師が目の前の生徒をどのように捉えるのか。その捉えた結果を踏まえて、どのように、どのような教材を作成するのか。その過程を参加者と共に考えていきたい。具体的には、 ① 社会科・公民科教師が授業案作成前に生徒の状況をどのようにとらえるのか。(量的分析・質的分析について) ② 社会科系科目におけるアクティブ・ラーニングを意識した授業づくり ③ 研究協議 ④ 創造的な授業づくりを目指して ⑤ リフレクションを行います。		一般に入手できるDVD化された映画や映像素材から戦争の諸側面と現代社会のあり方を考察するのにも有効な事例を紹介し、歴史的な事象や社会的な(記憶)を次世代に継承していく方法を検討する。		生徒が自ら問題意識を持ち、主体的に取り組むとき主権者としての自覚が高まり、歴史や社会のあり方を探究する力がついてくる。実際に戦争遺跡(登録研究所)を調べた渡辺賢二氏と高校生の取り組みを例に歴史教育のあり方を考える。			
			【国 語】		伊藤 剣 明治大学法学部専任講師		渡辺 哲男 立教大学文学部准教授					
			古文の授業 —奈良時代の文学作品の可能性—		作品の時代背景としての(文化)に着目した国語科教材研究 —井上ひさし「握手」を事例として—							
			教科書にはどの時代の文学作品も掲載されている。ただし、実際の授業では全ての時代を万遍なく扱うのが難しく、奈良時代がとりあげられる機会は相対的に少ない。そのため、多くの生徒は『古事記』などの作品名を知っている。その内容にはあまり馴染みのないのが実情である。しかし、奈良時代の作品に触れるのは重要な体験である。たとえば、ひらがなやカタカナのなかった時代に漢字だけいかに表現するかといった日本語表記の問題に接することは、日常生活で無意識の内に行っている書く行為そのものを見つめ直す契機にもなるだろう。そこで本講習では、あえて奈良時代の文学作品をとりあげることにする。当日は、この時代の文学研究を専攻する講師自身の読解や知見の一端を示すことで、奈良時代を扱った国語教育の可能性を考えてみたい。		日本文学研究における作者論からテクスト論への移行、さらに昨今の「アクティブラーニング」の重視によって、教室における文学作品の解釈は、学習者の「主体的な読み」を尊重するという動向にある。ただし、学習者が「主体的に読む」ということは、教師が「教室で何もなくなるということ」であってはならない。学習者が自由に作品を解釈するのなら、その授業に際しての教師の準備(教材研究)はより重要になる。「懐を広く」していなければ、学習者の多様な作品解釈に対応できないからである。本講習では、井上ひさし「握手」(光村図書ほか・中3)を主な事例とし、最新の研究成果を用いて、新しいスタイルの教材研究と授業づくりの可能性を考えてみたい。これにより、「作者の意図を考える」「登場人物の気持ちを考える」などといった問いに終始しがちな国語科授業を改善する契機としたい。							
【数 学】		佐藤 英二 明治大学文学部教授		渡邊 浩 明治大学理工学部教授								
生徒とともに作る数学の授業を目指して		数学は何の役に立つのか										
この講習では、授業への生徒の参加を促すために、2つのワークショップを行います。一つは、物を用いて数学的な関係を見つける活動です。生徒の探索的な活動をデザインする方法を考えます。もう一つは、生徒の語ったアイデアを活かして次の授業展開を考えるケーススタディです。生徒の素朴なアイデアを活かすために、何が必要であるのかという問題を、具体的な場面に即して考えます。なお、工作用紙やハサミなど必要なものはこちらで準備します。		大学に入学して来た新生に「今まで数学を学んで来て、数学が数学以外の何かの役に立ったという経験を語って下さい」と問うと、まず答えらしい答えは返ってこない。これは大変残念なことである。私達が目で見て、手で触れることのできる事物と、純粋な思考の産物である数学が、どのような形で結びついているかを知ることは、数学の魅力は何倍にもしてくれる。ここで大切なことは、単におもしろいというだけでなく、数学の深い認識に結びつくテーマを選ぶということである。やさしく魅力的な数学の姿を見てみたい。										
授業観と学問観の捉え直しを目指します。以下の5クラスから1つを選択となります。詳細については、ホームページないしパンフレットをご覧ください。 ① 英語 「CEFRとCAN-DO リスト」、「タスクに基づいた指導法とパフォーマンス評価」、「言語教師のポートフォリオを活用した省察」 ② 理科 「新しい学習指導要領の改訂と理科授業のデザインベース」、「新学習指導要領で求められている理科の授業デザイン」 ③ 社会・公民 「社会科・公民科における教材づくり研究」、「社会科・公民科の授業研究」、「歴史把握の方法(映画・映像から学ぶ戦争の歴史)」、「主体的学習の事例研究(生徒が主体的に取り組む歴史探究の取り組み)」 ④ 国語 「古文の授業—奈良時代の文学作品の可能性—」、「作品の時代背景としての(文化)に着目した国語科教材研究—井上ひさし「握手」を事例として—」 ⑤ 数学 「生徒とともに作る数学の授業を目指して」、「数学は何の役に立つのか」												